

穎原退藏著作



第二十卷

潁原退藏著作集

第二十卷

額原退藏著作集 第二十卷

定価 三八〇〇円

昭和五十六年一月十日印刷
昭和五十六年一月二十日発行

著者 額原退藏

発行者 高梨 茂

印刷者 山田 博

発行所 中央公論社

T104 東京都中央区京橋二一八一七

振替東京二二三四

©一九八一 検印廃止

目次

随筆

一

明恵上人 9
唐大和上東征伝 38

九

二

永遠への思慕——古典に求むるもの 47
遊心と童心 52
古典への信

四七

頼 58
新情旧詞 61

三

ゆかしさ 64
初心 71
了俊の言葉 78
道心と閑人 82
芸道 86

六四

聞かぬ初音 87
型について 90
古典と軍人——芭蕉を通じての感激 93

古典演劇の復活 97

四

言葉の美 100
講演の言葉 106
舌切雀と花咲爺 108

100

五

俳句と教養 111 戦争と俳句 116 陣中銃後の俳句 120 一つの対

話 123 現代俳句は第二芸術か 128 俳句と芸 134 現代生活と俳

句 137 現代俳句の立場 144 俳句に於ける写生 150 写実精神 156

俳句の象徴性 158 俳句の将来 172 批判の立場 178

六

真理・調和・無私 183 秩序の感覚 186 智慧を買った話 188 市

民大学と文芸博物館 191

七

句を作らぬ俳人 196 考証の確実性 198 本文の註釈 201 筆・墨・

紙 203 観世紙縷 206 諸礼集 208 夕霧の散歩——近松に描かれた夕

霧 212 歌麿の女 216 花見二郎 221

八

川柳正月風景 223 新春行事 227 初夢 231 若葉の感傷 236 宝

塚賦 238 夕かげ 243 柿 246 歳末随感 249

京にても京なつかしや 251 歴史 253 京の夏と蕪村 256 名月と

京都 259 淀川一覽 262 文学郷としての温泉 267 丹後三浜 271

竜門寺を訪ふ記 276 曙の白魚 282 百日紅 285 島の春 290 麦

笛 292 カンコロの話 294 一面識の印象 297 初対面の松字翁 301

雑纂

一

書くための読書 304 乱抽の讃 305 著書の正誤 306 旧刊紹介 309

良書の推薦 311

近刊いろく 312 書齋に閑坐して 317 新刊紹介 326 新刊 329

『近代歌謡集』を読む 360 辞典の文化的意義——『日本文学大辞典』 363

ウィリアムズ氏の源氏物語評を読む 365 『五島民俗図誌』をよむ 373

伝説と文芸——『義経伝説と文学』を読む 376 『戴冠詩人の御一人者』 378

岡崎義恵氏『日本文芸の様式』 380 『詩集夏花』 384

『江戸文学叢説』を読む 387 『江戸文学研究』——山口剛氏を憶ふ 388

『江戸文学辞典』390 『近世小説』394 片岡良一氏の『井原西鶴』397

近藤忠義氏著『西鶴』403 真山氏の西鶴研究 406 滝田貞治氏著

『西鶴裸裎』『西鶴の書誌学的研究』411 若月保治氏著『古浄瑠璃

の新研究』416 『連歌の史的研究』——福井氏の新著を読む 417 星加

宗一氏編『校本竹林抄』を推す 420 『俳文学の考察』422 石田

元季氏著『俳文学考説』424 志田義秀『問題の点を芭蕉の伝記の研

究』426 『芭蕉俳諧論集』——小宮豊隆・横沢三郎編 430 俳書の註釈と

句集の編纂——『風俗文選通釈』と『蕉門名家句集』434 『猿蓑俳句鑑賞』

(伊東月草) 437 「去来句集輪講」を読んで 440 「武玉川三篇研究」

を読む 448

二

『蕪村全集』はしがき 458 『蕪村全集』附記 461 『蕪村全集』改

訂版に添へて 466 新版『蕪村全集』序言 468 『太祇句集』後記 470

『俳諧史の研究』自叙 473 『俳諧史の研究』附言 474 『俳諧史の

研究』改訂版序 478 『俳諧名作集』序言 481 『俳諧史論考』序 484

『俳諧史論考』後記 485 『江戸文芸論考』序言 488 『俳諧文学』

はしがき 492 日本古典読本『芭蕉』はしがき 493 『芭蕉・去来』

序 494 『芭蕉・去来』後記 495 『江戸文芸』序 497 『蕪村』序 498

『蕪村』後記 500 『風雅の道』序 501 『雀色時』序詞 503 『雀

色時』後記 504 『芭蕉講話』序 505 『芭蕉講話』補訂版序 508

『俳諧精神の探究』序 509 『蕉門の人々』序 511 『蕉門の人々』後

記 512 新校『芭蕉俳句全集』序 514 『俳句周辺』序 515

補遺

『沙石集』の長享古写本について 517 磐斎の人と歌 524 笑謡に

ついて 532 江戸文芸の研究法 535

百人一句 546 化政俳壇に於る木朶 548

芭蕉文集について 552

風の名 558

後記

隨筆
•
雜纂

随筆

一

明恵上人

（『文明評論』昭和十五年七月・八月、『帯木』昭和十八年一月・二月、『明恵上人』昭和二十一年三月、生活社）

これは明恵上人に関する断片的な雑記にすぎない。この偉大なそして崇高な人間の全貌を、伝記的資料の総合から、又仏教史乃至精神史的な立場から精細に描き出す如きことは、もとより私のよくする所ではない。私はただ上人の清純な一生を深く思慕するだけである。あまりにその高く清く純であるが故に、近づき難い距離の大きさを感じながらも、それは上人への私の親しみを少しも妨げるものではなかった。上人が自らに鞭うった厳しい苦難の行は、常人にとつてむしろ威圧的なものでさへあつたけれども、釈尊の在世を慕ふ彼のひたすらな情熱と、仏祖に随順する清浄無垢な童心とは、いかなる凡夫の胸にも美しい詩を想はせずに居なかつたからである。

時代の大きな悩みを一身に感じとつて居た点に於て、法然の説法はより人々に魅力的であつたらう。又真理探求への情熱をその思索の深さで量らうとするならば、道元の哲理をまづ第一に推さねばなるまい。けれども彼の信ずる絶対者への熾烈な思慕が、明恵上人ほどに純真な形をもつて現はれたものを、我々は他に知るであらうか。奇蹟を語ることは多くの高僧伝に附随した常套の事である。勿論基督の徒は基督の奇蹟を信ずるであらう。親鸞の弟子は親鸞の奇蹟を語り伝へるにちがひない。それは信仰として正しい。だが一般の場合それらの荒唐な伝説は、ただ象徴的・暗示的な意味で理解されるか、さうでなければ低級な信徒たちに対する方便的説法と見なされるにすぎない。然るに明恵上人に伴ふ数々の奇蹟を、奇蹟とさへも思はぬほどに自然に我々は受取ることが出来るのである。科学の合理主義に養はれて来た現代人の知性が、さうした非合理への承認に少しも摩擦を感じないのは、上人に対する宗教的な感情の眩惑によるのであらうか。いやさうではあるまい。上人の奇蹟は彼の純真さが生んだ美しい清らかな夢であつたのだ。さうして我々はその夢を愛する。人々が彼の奇蹟を信ずるのは、実に詩を愛し信ずる心に外ならない。

上人の伝記は夢を以て始まる。彼は承安三年正月八日辰の刻、紀州有田郡石垣庄吉原村に生れた。父平重国は高倉院の武者所に仕へた武士であり、母は紀州の土豪湯浅權守藤原宗重の第四女であつた。父はかねて法輪寺に詣でて男子の出生を祈つた。ある夜の夢に一人の童子が来て、「汝が乞ふ所の子を与へよう」と言つて、一の針を耳に刺すと見て覚めた。又母は六角堂の観音に詣でて、毎日堂を遶ること一万遍、その間普門品を誦しつつ同じく子を授け給へと祈つた。すると、ある時堂前に坐睡をして居た

夢に、人が来て金果一顆を与へたので、これを取つて懷に入れると見て、その後幾ばくもなく懷妊したといふ。父も母もかうした信仰の篤い人々だったのである。さうして夢を信じ、その夢の中から上人は生れた。

上人の出家もまた夢によつて告げられた。『明恵上人伝記』には「七歳の時養母の夢に、此の児白布を著て西をさして去らんとす。よつて白布を以て縛りて柱に結びつけたるに、引切つて去ると見る。この事を高雄の上人に語る。上人はいはく、昔かの玄奘三蔵の母の夢に、白布を著て西をさして飛び去ると見ける由、彼の伝に見えたり。希有の事かなとて請ひて弟子にせん事を約す」と伝へて居る。もとよりかうした伝説は、むしろ有りふれた高僧伝の平凡さを思はしめるにすぎないであらう。けれども上人が十九歳から五十八歳までの四十年間、丹念に「夢之記」を書きつづけて居た人である事を思へば、平凡であるべき夢の伝説にも、何かの意味を考へずには居れないのである。高山寺藏上人自筆本の『夢経抄』の表紙に、

ながき世の始めをはりも知らぬ間にいくそのことを夢と見つらむ。

と題された一首の和歌は、まことに上人の夢に対する信仰を語るにふさはしい。夢は夢のままに現であり、現は現のままに夢である。その夢を上人は一生涯美しく清らかに守りつづけたのである。さうしてそれは世にも稀な詩の生活であつた。

養和元年九歳の秋に上人は高雄に上つた。そこで叔父の上覚上人の許に引取られ、僧とならうとしたのである。上人はその前年すでに父とも母とも死別して居た。今また故郷を離れて淋しい山中に入るの

だから、心細さは一入である。何となく名残が惜しまれて、泣く泣く馬に乗つて行つた。鳴滝川を渡る時馬は立ちどまつて水を飲まうとしたが、上人が手綱を少し引くと、主じの心を知つたのであらうか、そのまま歩みをつづけながらに水を飲んだ。すると上人はこれを見て、幼な心にも深く自分の弱い心を恥ぢた。「このやうな拙い畜生の身ですら、人の心を弁へ知つて足を留めないのだ。自分は今父母の遺命によつて、この山へ登らうとするのに、勇む心がないといふのはどうした事であらう。馬にすら遙か劣つた事ではないか」さう思ふと忽ち恋慕の心をとどめて、一筋に貴い僧となつて両親をも衆生をも導かうとする大願を心中に発した。

上人はただ夢に溺れ、夢を楽しみとする人ではなかつたのだ。貴いひじりとなる為には、すべての愛欲を絶ちあらゆる苦難に堪へ忍ばねばならぬといふ強い意志は、すでに彼の幼な心に固く抱かれて居たのである。それから修学に打坐に行法に、まことに彼は昼夜不退の精進をつづけた。もとより一代の高僧と仰がれる程の人にこれほどの行道は必ず有るべきことであらう。道元や日蓮が、道の為に闘つた志は、鉄の如く強く厳しかつた。しかもその中から何物をも焼き尽くすやうな烈しい情熱が燃え上つて居る。宗教家としての明恵上人を大成せしめたものもそれと同じ意志と情熱との力であつた。鎌倉期の新興仏教の性格も、またかうした意志的・情熱的な点に多く求められねばならぬ。しかし明恵上人の信仰の最も強い原動力となつたものは、それよりも彼の終生渝らなかつた無垢の童心であつた。それは同時に又、彼が生涯夢みつづけた美しく崇い詩心でもあつた。

上人が四歳の時、父は戯れに我が子に烏帽子を著せて、「ム、いい男ぶりだ。成人したら立派な武士にして御所へ参らせよう」と上機嫌で語つた。だが上人はこの頃早くも法師の姿を窃かにあこがれて居

たのだ。「かたち美しとて男になさんといふに、不具^{ふぐ}づきて法師になされんと思つて、ある時縁より落つ。人見つけて抱きとつて、あやまちげに思へりき。その後ある時面を焼きて、疵をつけんと思ひて火箸を焼く。その熱気恐ろしく覺えて、まづ試みに左の臂より下二寸許の程に引当てつ。その熱さに涕泣して面には当てずしてとゞまりぬ。これ仏法の為に身をやつさんと思ひし始なり」と、上人の伝記には伝へて居る。これは勿論上人みづから弟子に語つた事であらう。この話が上人や弟子たちの故意の捏造でなかつた事は、上人の一生の行状に徴して明かである。上人は自らかう語つたといふ、二一歳の時、乳母抱きて清水寺に詣づ。時に堂内に僧俗群集^{くんじゆ}して、或は看經し或は礼拝す。その声を聞くに何と思ひ分きたる事はなかりしかども、心澄みてたふとく覺えき。その後地主^{ぢしゆ}の御前に猿樂しける所へ、乳母見物の為に具してまかりたりしに、それは見聞したくもなく覺えて、先の所へ行かんと啼きたりし、これ心に覺えて仏法を尊く思ひし始なり」と。まだ一点の汚れも知らぬ幼な心に、ふと尊くおぼえた感激が、彼の一生を支配した。その為に四歳の幼児が、みづから不具となり面を焼かうとしたのである。これは知性に導かれた意志とは言へない。ただ、この感激へ一筋にあこがれ行く純情といふ外はなかつた。さうして上人はこの純情——詩心を生涯失ふ事がなかつたのである。

上人がすべての誘惑にうち克ちながら精進した姿に、強いかつ烈しい意志的なものを感じながらも、それがいつも上人の美しい夢の中に融かされて居ることに、人々は不思議な驚きを覚えるにちがひないけれども上人の持戒行法が、あの幼な児の心から発して居る事を思へば、上人がむしろ夢に生き通したともいふべき事が、極めて自然に理解されるであらう。そこに道元とも法然とも親鸞とも日蓮とも異つた、上人独自の性格があつた。歴史的な立場から見るとすれば、上人は決して新しい時代を代表すべき宗

教育家ではなかつたらう。しかもそれ故にまた時代を超えて、深く人の心に生きるものを持つて居た。それは言ふまでもなく彼の夢に脈うつ純真な詩情の美しさである。

如來は入寂の中夜に、「汝等比丘まさに自ら顔を摩なつべし。已に飾好を捨てて壞色あじきの衣を著す。云々」といふ遺誡を垂れた。かくして頭を剃り袈裟を纏つた僧が、みづから、その僧形に誇る心が生じたならば、円頂緇衣のしるしは更に無いのである。上人はこの慢心をひそかに恐れた。道の為に身をやつすとならば、円頂緇衣の姿はおろか、眼をも抉り鼻をも切り耳をも削ぎ、手足を断ち尽くしても厭つてはならないのだ。上人は古賢のさうした教を深く服膺した。そして慢心を抑へる為には、この教のままに従ふ外はないと思つたのである。けれども「眼を抉らば聖教を見ざる歎あり、鼻を切らば涕洟垂りて聖教を汚さん、手を切らば印を結ばんに煩ひあらん」と思ひ悩んだ。ただ耳は削いでも聞くのに差支へはない。ことさらに五根を欠くのは不自然であるが、今はその不自然なる行為も道のために止むを得ない。のみならず五体満足であつては、人々の崇敬に妖かされて、思ひの外に世間的の地位を得ないとも限らない。不具であるならば身を憚つて、人中にもあまりさし出ない事になるであらう。上人の志はすでに決したのである。遂に仏前で念誦しつつ、自ら剃刀を取つて右の耳朶を切り取つた。

このやうな行ひは、もしそれが他の人であつたならば、あまりに狂的にいとはしく感ぜられ、又故らに銜つた如くも思はれるであらう。けれども上人をこの行為に導いたものは、やはりひたすらに如來に近づき奉らうとする純情の外にはなかつた。かの清水寺で幼な心に感じた仏の世界へのあこがれは、いかなる苦難をもあへて辞しない志の固さになつたのである。だから彼がかうして耳を切つた夜、夢に一